

政治権力の魔術

盛田 常夫

国民の命運を決するような政治意思決定が、舞台裏の人間関係や意外に単純な判断で決まることがある。それはなにも独裁政権に固有の現象でない。今次のアメリカのイラク攻撃もその例に漏れない。イギリスの参戦根拠の粉飾はいまだにイギリス政界を揺るがし、ブッシュ政権の前財務長官オニールの暴露本 (*The Price of Loyalty*) は、「初めにイラク攻撃ありき」の内幕を白日の下に晒している。

作られた口実

オニール前長官によれば、ブッシュ就任直後からイラクへの攻撃の可能性が検討されていた。これを実行するために編み出されたのが、ネオコンのイデオロギー、「先制自衛攻撃権」だ。

アメリカが潜在的脅威とみなせば、相手の攻撃の有無に如何に関わらず、相手を攻撃する権利があるという主張である。アメリカの主観的な判断で先制攻撃できるという、強者の論理だ。旧ソ連が東欧諸国を支配した「制限主権」論と酷似している。ところが、テロ集団は国家組織ではない。それでは困る。だから、テロとの関係の具体的な証拠がなくとも、テロにかかわる可能性のある国を列挙して、それを攻撃目標にする。これが「悪の枢軸=テロ国家」論だ。

「9.11」事件でアメリカ政府は報復を決断した。前から攻略を狙っていたイラクに照準が当てられた。しかし、いくら何でも、「9.11」事件を口実にイラクを攻撃するわけにはいかない。そこで、「先制自衛攻撃権」の発動が検討された。その根拠が「大量破壊兵器の差し迫った脅威」だった。しかし、もう今ではこの作られた口実は色あせてしまっている。いつの間にか、イラク攻撃は「フセイン独裁政権の打倒」にすり替えられ、既成事実が押しつけられている。

かくように、現在にいたるまで、今次のイラク戦争は根拠と論理が恣意的で一貫していない。

根拠薄弱で多数の人命を犠牲にする戦闘行為が、国際法上、承認されるわけがない。

当然の結果として、フセイン逮捕の容疑も不明瞭だ。「大量破壊兵器所持による世界脅迫容疑」であれば、論理は一貫している。しかし、アメリカですら、もうそんな容疑が成立するとは考えていない。だから、「戦争犯罪者」として扱うという。しかし、ふつう「戦争犯罪」とは「無謀な戦争を遂行し、国民に犠牲を強いた責任」だが、アメリカが戦争を仕掛けた今回の場合、この論理には無理がある。要するに、フセインはアメリカの「戦時捕虜」以上のものではない。

過去の悪行を暴いても、それは後付の理由。しかもそれはアメリカが裁くべき筋合いのものではなく、イラク国民が裁くべきものだ。

権力と国民の距離

自分たちが選んだ政権がおこなうことだから、アメリカ人はそれでも良いだろう。しかし、イラク攻撃がもたらす混乱と恐怖の拡散にたいして、他の諸国民は抗議し反対する権利をもつ。大統領や首相が代わるぐらいで、無用な混乱とテロの脅威を拡散させた責任は取れない。

権力を実際に動かすのはパラノイド型の人間や集団だ。民主主義とはいえ、日常的な権力行使ははるか離れた別世界で計画され実行されている。権力と一般国民との間の距離は「民主主義」国家であっても、きわめて遠い。北朝鮮の独裁政権を嘲笑する前に、自らの国家の政権と国民との距離を考えて見るがよい。国家の政策にどれほど国民が関与し、責任をもっているのか。国民が関与するのは選挙だけ。後の政治決定は政治家に「丸投げ」ではないか。その投票行為さえ満足に行われぬ現代の「民主主義」とは何だろう。北朝鮮との違いは、たんに生活の文明度の違いだけではないか。

側近政治が生んだ喜悲劇

チェルシーを買ったアブラモヴィッツが、F1のジョーダン・チームと接触したことが話題になっている。サッカーだけでは物足りなくて、F1にまで食指を伸ばそうというのか。

ホドルコフスキーは政治に進出しようとして待ったをかけられた。アブラモヴィッツは趣味にお金を使うだけだし、Yukosへの牽制手段として利用価値があるから見逃されているようだが、度が過ぎると痛い目に合うだろう。

アブラモヴィッツの資産を構成するSibneftやAeroflotの株式は、クレムリンのゴッドファーザーと呼ばれたベレゾフスキーの存在なしには取得できなかった資産である（本誌9月号参照）。

このベレゾフスキー、ソ連崩壊前は科学アカデミー会員の数学者だった。ソ連の国民車Lada製造会社の最適化計画を立案するコンサルティングに携わったことで、人生が一変した。ソ連崩壊の最中、この仕事を通じた人間関係を利用して、不足財の乗用車を売買するビジネスを興した。Ladaの仕入れで優位に立ったベレゾフスキーだが、自然の成り行きでモスクワのマフィア戦争に巻き込まれた。売れる商品、なかでも乗用車の売買はマフィアの資金源だったからだ。ところが、ベレゾフスキーはチェチェンマフィアをバックにして、1990年代初めのモスクワ・マフィア戦争を乗り切った。これでベレゾフスキーは一躍、ビジネスとマフィアの世界に名の知られた存在になった。数学者が有能なマフィアになるという世にも希なケースである。

旧共産党人脈を持たなかったベレゾフスキーの最大の弱みは、権力へのコネクションの欠如だった。そこで、彼が目をつけたのは、エリツィンが絶大な信頼を置いていた自伝作家ユマーシェフと、エリツィンが溺愛していた末娘のタチアナだ。性格的に横暴なエリツィンには日常的に相談する相手がおらず、テニスコーチや自伝作家がその代役を果たしていた（オルバン首相もテニスコーチと首相府アドバイザー契約を結んでいた）。小遣い銭に困っていたエリツィンに不自由しない印税をもたらしたこの作家

氏は、顔パスでクレムリンに出入りできるほど、エリツィンの信頼を得ていた。

ベレゾフスキーはこのユマーシェフに接近し、タチアナに取り入った。1994～95年当時のエリツィン政権は、エリツィンの意向をタチアナが代弁し、これをチェルノムイルジンが実行する形で機能していた。ベレゾフスキーはタチアナに宝石類や高級乗用車を贈り、クレムリンのエリツィン・ファミリーへの食い込みを図った。

このベレゾフスキーに、ロシア第二の巨大企業Rosneftの二つの優良事業所を切り離して、Sibneftを設立するアイデアをもちかけたのがアブラモヴィッツである。エネルギー産業に足場のなかったベレゾフスキーはこのアイデアに飛びつき、Sibneft設立の大統領令の発布を引き出し、同時にSibneftほか巨大エネルギー企業の悪名高い民営化計画（負債と株式の交換スキーム）の閣僚会議決定を実現させた。タチアナの亭主はRosneftのオムスク精油所と商売している石油ブローカーで、同業のアブラモヴィッツとも面識があった。エリツィン・ファミリーも十二分に潤うスキームだった。

Sibneft株51%の入札は1995年暮れに行われ、ベレゾフスキーのライバルInkom Bank系列の会社が1億7500万ドル、ベレゾフスキーのダミー会社が1億30万ドルで応札した（最低入札価格は1億ドル）。ところが、オークションが始まって間もなく、Inkom Bank系から入札を辞退するFAXが届いた。「命には代えられない」ということだ。オークション成立には最低二件の応札が必要だが、手回し良く、Yukos株を手に入れたホドルコフスキーが、Menatep Bankのダミー会社に1億10万ドルで応札させていた。Sibneftの現在の株主構成は開示されていないが、アブラモヴィッツと、イギリスに亡命しているベレゾフスキーのダミー企業が所有しているようだ。

こうして巨額の国民資産が一握りの知恵者の所有物に転化され、アブラモヴィッツの遊び金の元手になった。権力が生み出す錬金術マジックと言えようか。

（2004年1月）
（関連記事は<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）